

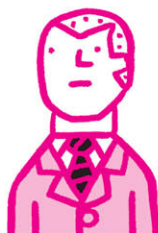
永松伸吾さんに「これからの災害支援」を聞きにしてみました

よろしくお願いします



荻上 チキ

こちらこそお願いします



永松 さん



永松伸吾さんは「防災や減災の研究者」です。といっても防災バッグの中身を考えたり、非常食のおいしい料理法を教えてくれる人ではありません。行政や被災者、ボランティアの協力のあるべき姿を考えたり、44ページでも少し紹介した、被災者が復興の仕事をして賃金を得る「キャッシュ・フォー・ワーク」の仕組みを日本に広めたりと、ヒト・お金・モノ・アイデアなどなどをフル活用した防災のありかたを考えている人です。そんな永松さんに、東日本大震災で変わったこと、新しい防災の動きなどを教えてもらいました。

すでに、たくさんの情報が集まる



東日本大震災で、防災は変わりましたか？

大きな変化は“情報化”ですね。これまでの防災は「津波の高さがこれくらいなら、被害の規模はこれくらいになるだろう」といった「予測」による「予防」に力を入れていました。ところが阪神・淡路大震災から東日本大震災のあいだに、インターネットなどさまざまなテクノロジーがものすごい勢いで発達しましたよね。これにより、たとえば地震のすぐ後に、各地で海面が何センチ下がったといったことが瞬時にわかります。これでかなり正確な避難指示を瞬時に出すことができます。



情報化によって何かが変わるのでしょうか？

新しい技術により逆に古い言い伝えなども活用しやすくなるかもしれません。「津波が来たら家族がバラバラでもとにかく高いところに逃げろ」という「津波てんでんこ」の教えが多くを命を救ったことはよく知られていますが、リアルタイムの情報と「てんでんこ」がうまく連携すれば、さらに減災に役立ちそうですね。



避難訓練のかたちも変わりそうですね。

こういったローカルな情報を組み込んだ「地区防災計画」を市町村や都道府県単位で独自に決めて、国の災害対策基本法に盛り込んでいく方針も定まりました。たとえば高知県黒潮町で行われている津波を想定した避難訓練では、避難する道々に時計を置いて訓練しています。津波が到達すると考えられる時間までに逃げられるかどうかを、住んでいる人たちが意識しながら訓練してみると足りない備えも見えてくるし、もっと良い避難計画をつくることもできます。こういう取り組みが増えていますね。



レジリエンスって何？



ところで「減災」ってよく聞くんですけど、
いったいどういうものなんでしょうか？

大きな災害を完全にゼロにすることは、残念ながらできません。起こさないための対策が「防災」で、起こったときに被害を小さくするための備えが「減災」です。東日本大震災は「巨大な防潮堤があるから絶対に大丈夫だ」と思われていた地域にも大きな被害をもたらしましたが、防潮堤による「防災」だけでなく、防潮堤が決壊しても被害を小さくできるように避難訓練をしっかりするといった「減災」の二段構えが大事なんです。



「防災から減災へ」ではなく、
「防災も減災も」なんですね。

そうです！また、最近注目されている言葉に「レジリエンス(回復力、復元力)」があります。災害の被害には職を失ったり、子どもが進学を諦めたりといった目に見えにくい損失もありますよね。就職支援や教育支援は起こってしまったマイナスを小さくし、元の生活に近づけていく取り組みですが、レジリエンスとはそんな「元に戻る力」のことなんです。



ボランティアもレジリエンス向上に役立つことはできますか？



もちろん！ぼくも最近、豪雨災害のあった兵庫県丹波市に一人のボランティアとして行って、「助けにきた人がいる」ことの力を再認識しました。いっしょに泥のかき出しをする、それだけで大きな「つながる力」が生まれるんですね。これもまたレジリエンスをもたらすものなんです。ただ、阪神・淡路大震災の直後に個人でやってきたボランティアが現場を混乱させたという反省が、東日本大震災ではちょっと裏目に出た部分もあったかもしれません。



反省が裏目に出たとはどういうことですか？



ボランティアが萎縮しすぎた面もあるのです。阪神・淡路大震災のときは「とにかく助けたいんだ！」という思いだけで現地に乗り込んだ人も多くて、それが混乱をもたらした面もあったのですが、励まされた人もたくさんいました。



いまはそういう支援はネットですぐに非難されがちですし、組織化も進んでいるので、その分「すぐに飛んできた人」が少なかったのかもしれませんが。難しいところですが、組織化されたボランティアだけでは救えない状況も、災害初期にはたくさんあります。リスクを覚悟して飛び込む人たちと、組織の力の両方が必要なんだということは知っておくべきことでしょうね。



避難訓練だけでなく「支援訓練」を広めるには、どうしたらいいですか？

支えあいのトレーニングはすごく大事ですよ。誰かを支えるときに役に立つのは、誰かに支えられた経験だったりしますから。そのためには被災者の声を集めることが大事です。誰かに支えられた記憶は、いつか誰かを助ける力に変わってでしょう。



キャッシュ・フォー・ワークのように、災害のすぐ後から被災者が復興に参加できることも大事ですね。

支援「する人」と「される人」の関係ではなく、どちらも「当事者」になる感覚ですね。被災者も早く元気になりやすいし、ボランティアの人も自分が被災したときのヒントをたくさん手に入れられるはずですよ。





防災や支援にあらかじめの「正解」なんてないということがよくわかりました。この本でもいろいろな取り組みを紹介しているけど、それらは「正解」ではなく「知恵の種」だと思ってほしいです。

黒潮町の例でも住民の「知恵」にシミュレーションという「科学」を持ち込んだことがすごく面白い。こういう知恵のレジリエンスはどんどん強くなってほしいですね。



永松伸吾 (ながまつ・しんご)

災害経済学 / 防災・減災・危機管理政策

1972年福岡県北九州市生まれ。

大阪大学大学院国際公共政策研究科博士後期課程退学、同研究科助手。2002年より神戸・人と防災未来センター専任研究員。

2007年より独立行政法人防災科学技術研究所特別研究員を経て2010年より関西大学社会安全学部・大学院社会安全研究科教授。

主著に『減災政策論入門』(弘文堂)。

一般社団法人キャッシュ・フォー・ワーク・ジャパン代表理事。

